

仲寒蟬 プロフィール

1996年 「港」俳句会に入会

2004年 第1句集『海市郵便』上梓、これにより
山室静佐久文化賞受賞。

2005年 第50回角川俳句賞受賞

2013年 「群青」創刊同人

2014年 第2句集『巨石文明』上梓、これにより
第65回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

2019年 「港」終刊

2020年 代表として「牧」「平（ふらつと）」創刊。

2023年 第3句集『全山落葉』上梓

現在 「牧」「平（ふらつと）」代表

「群青」同人

令和5年 俳人協会秋季俳句講座

「戦争」にまさる季語はあるか？

「牧」「平」代表、「群青」同人

仲 寒蟬

はじめに

・私自身は普段季語から発想して俳句を詠んでいる。

・俳句のテーマは花鳥風月だけではない。例えば戦争。取合せの句では「戦争」に匹敵する強力な季語はあるか。その場合そもそも季語は必要か。

・戦争と詩……

古代ギリシアの叙事詩『イーリアス』

フィンランドの叙事詩『カレワラ』

古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』

中世フランスの叙事詩『ローランの歌』

・日本でも……『万葉集』の防人の歌

防人に行くは誰が背と問ふ人を見るがともしさ
物思ひもせず

父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れ
かねつる

・俳句が戦争を題材としたのは明治以降である。

・もちろん特定の政治的立場を表明することは俳句として相応しくない。

・仮令「戦争反対」という誰もが否定できないテーゼであっても、それを俳句で言ってしまう？

・俳句は成り立ちからしても、歴史的に言っても、常に庶民の側、虐げられる側に立って物を言う文芸。

・安全な場所に身を置いて何の反戦かとの批判もあるうが声を挙げ意思表示することに意味があるう。

1. 総論

芸術と戦争

芸術家が戦争に直面した時どう行動したか。

・二十世紀で最も偉大な指揮者、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーとアルトウーロ・トスカニーニ。

・ピカソの『ゲルニカ』

・藤原定家

紅旗征戎吾事にあらず（『明月記』）

2. アジア・太平洋戦争と 新興俳句

○戦火想望俳句

火野葦平『麦と兵隊』を読んで（「俳句研究」所収）

人血のあふれては乾く千里の麦

満月皓々たり流弾も見ゆるかと

死なざりし横腹を蚤にくはれける

日野草城

「風」第七号「戦争」より

射ち来たる弾道見えずとも低し

砲撃てり見えざるものを木々を撃つ

あを海へ煉瓦の壁が撃ち抜かれ

三橋敏雄

逆襲ノ女兵士ヲ狙ヒ撃テリ

パラシウト天地ノ機銃フト黙ル

占領地区の牡蠣を將軍に奉る

西東三鬼

○「京大俳句」と 新興俳句弾圧事件

シヤンペンとオムレツに大佐の嘔吐

仁智栄坊

一兵士はしり戦場生れたり

杉村聖林子

突撃の燃えたつ顔が近く飛ぶ

波止影夫

母の手に英霊ふるへをり鉄路

高屋窓秋

黒髪の国の二日を黙し征く

平畑静塔

獄凍てぬ妻きてわれに礼をなす

秋元不死男

やがてランプに戦場のふかい闇がくるぞ

富澤赤黄男

凍土ゆれ射ちし砲身あとへすざる

長谷川素逝

闇ふかく兵どどと著きどどとつく

片山桃史

戦争が廊下の奥に立つてゐた

渡邊白泉

銃後といふ不思議な町を丘で見た

夏の海水兵ひとり紛失す

憲兵の前ですべつて転んぢやつた

○戦後の作その他

敵といふもの今は無し秋の月

高濱虚子

広島や卵食ふ時口開く

西東三鬼

湾曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

送る万歳死ぬる万歳夜も円舞曲

攝津幸彦

幾千代も散るは美し明日は三越

南国に死して御恩のみなみかぜ

松島を

逃げる

重たい

鸚鵡かな

高柳重信

あやまちはくりかへします秋の暮

三橋敏雄

戦争と畳の上の団扇かな

戦争にたかる無数の蠅しづか

忘れちやえ赤紙神風草むす屍

池田澄子

戦場に近眼鏡はいくつ飛んだ

ああ弥生ばらまかれたる焼夷弾

大牧広

ヨットレースの海にねむりし特攻機

3. シベリア抑留俳句

敗戦にみな焼く万葉集だけ残し 小田保

自動小銃抱くソ連兵より露語盗む

秋夜覚むや吾が句脳裏に刻み溜む 石丸信義

伐採のノルマ完了眉氷る 百瀬石濤子

※大関博美著『極限状況を刻む俳句―ソ連抑留者・満州引揚げ者の証言に学ぶ』コールサック社

※高杉一郎著『極光のかげに』岩波文庫

※辺見じゅん著『収容所から来た遺書』文春文庫

ウクライナ戦争はロシアの庶民にも傷跡を残した。戦争はどちらの側にとっても不幸でしかない。

国境の列避難の少女にサボテンの鉢 ナタリア

※馬場朝子著『俳句が伝える戦時下のロシア』

4. 大牧広の俳句

第四句集『昭和一桁』

日本人には八月は暗すぎる

第五句集『風の突堤』

夏景色とはB29を仰ぎし景

知覧なりけり望郷のつばくらめ

第六句集『冬の駅』

サイパンへ滅びてゆきし雲の峰

ヨットレースの海にねむりし特攻機

第七句集『大森海岸』

「なにもかも焼けた」と母の灼けし髪

進駐軍の尻の大きさを雁渡る

第九句集『地平』

はるかなり進駐軍といわしぐも

第十句集『朝の森』

開戦日が来るぞ渋谷の若い人

敗戦の年に案山子は立つてゐたか